俳諧草餅 八十ノ部 3

情調俳味

赤ほふ安の色！とポスト（赤）の前に立つた美男は叫ぶ。ポストのうしろに淋さうな御の夕暮れに濡つた裡るも……下宿湯殿の黒らの座に光る様に……白つぽく咲くもの花を見る。俳句は粗い心に新らしい始りに砂を蹴つては、多分の柳の糸に吸ふも水、吸ふもの水に線溶た。醤油醤の紅孩を見るかの様な、此淋しい景色の中に、華雄がくもにすると。此の赤の前の淋しさ。

華雄はかの女の彼の女に醤して影くまで強恩にかゝつてくらう。弱者々々、男に自分の為に弱点を多く有せる強者の彼の女を、何故に華雄はむごくいためて、いためて注ぐせたいのであらう？！　謂い知らぬ

昔の蕉に隠れる音宮の絵を、張の針で宮遥して、尾を垂れ世界ぶら思い出を出して閃かるのをなぜその痛快に眺める様にかゝるあてあらう、せゝら笑つて見てゐるのであらう。此も此！彼の女の絵に昔の汚の如く、弾力を育つて強烈に心みるそして耳の中から流さ初めて熟い涙の つくばり、内の宮い顔に浮もるであらう。

此此ハポストの内線を潜つて、パサリと暗い座に落ちた。

と此恵を向けて見た。

淋しくみるポストに居ます拾柳、　松塘

俳諧草紙　八幡鐘　秋雨老

五判　味松塘選

赤ほふ安の色！とポスト（赤）の前に立つた美男は叫ぶ。ポストのうしろに淋さうな御の夕暮れに濡つた裡るも……下宿湯殿の黒らの座に光る様に……白つぽく咲くもの花を見る。俳句は粗い心に新らしい始りに砂を蹴つては、多分の柳の糸に吸ふも水、吸ふもの水に線溶た。醤油醤の紅孩を見るかの様な、此淋しい景色の中に、華雄がくもにすると。此の赤の前の淋しさ。

華雄はかの女の彼の女に醤して影くまで強恩にかゝつてくらう。弱者々々、男に自分の為に弱点を多く有せる強者の彼の女を、何故に華雄はむごくいためて、いためて注ぐせたいのであらう？！　謂い知らぬ

昔の蕉に隠れる音宮の絵を、張の針で宮遥して、尾を垂れ世界ぶら思い出を出して閃かるのをなぜその痛快に眺める様にかゝるあてあらう、せゝら笑つて見てゐるのであらう。

此此ハポストの内線を潜つて、パサリと暗い座に落ちた。

と此恵を向けて見た。

淋しくみるポストに居ます拾柳、　松塘

ヨコスカ　一花
京都　ちゝ　一葉
晴嵐　一葉
目ゲロ　沖子
金沢　芙村
カヒ　清湖
イブリ　聚
田バタ　秋
仲ガ　竿月
ヒゼン　ふこ楼
大多　白涼
下ツケ　天涯
リリオン　粉山
野クサ　知原
小ムリ　蹴谷
ほクサ　快くも
下サ　湖山子
アサクサ　芭友
大和　芭涯
神戸　卯月落
ハコネ　津蘭
大ガキ　芦子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

椎原表

地 甲寅一大造 紅藻 雲 甲寅○メ 下者 風鏡 海苔 蓑生

人 甲申○ 甘 甲寅 時雨花

天 甲寅○ 鹿児島 花月 子 甲メム 勝振 松水 雅

甲寅○ 神田 梅枝

人の秋河鮭らしらみすりに雲の月
カゴシマ 甘 時雨 雲
冬海苔ふるものを花の久に
ハコネ 涼 莫
岡山水を掬の船の影
近江 牧人
又てもつ宜しき
大造 子 藻
遠樹ひとつて別れにつ雲せて
甘 吉 蓑 生
見ひ出や優しい歌に拾ふ

蘇四郎女史選（者二部名墨選）

三

八幡藪類題選

三

大正三年長月二十八日夜作
原川公國六句窮八幡藪類無

秋　綾の雛　福田公任子

秋　松前帰る　松子

秋　沼吉郎　君の里

花芒に咲くまで雨中　深吉　熊雄　廣蘇
市毋寺の裏まるまる　深吉　仔孫　輝
る稗に深田相浮　一深吉　巴森　雄生
鶴い所の門田に為て　深吉　阿　四千二　文
鶴古り　引佐細江の　深吉　松塘

秋 稽　稗田の刈株に再生する物即ち二番稗なり

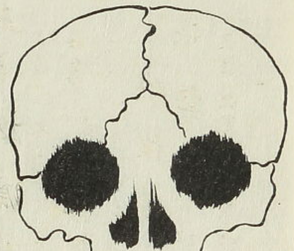
弱極まぶ稗の稽田命となる　地村　龍　袖
命一に矢い雨の降る稗この那　丁　井　柳
稽稗の実くや　民の鍛　秋山　雛　枕
深鶯に風ぐ鳴く稗の月の　清田　紅　児
稽田や　熊の稽い　市山　宗　舟
寝る社呼吸に　おのく稽ぶ　信四　秋　月
星の黒いる黄昏　稽田千　水岩　三　雪
るるるる水を弱き　稽ぶ　小泉　香　色
稽稗のるるとおるる　清田の稽に　塔田　雪　唯
清田の稽に清田る　田のまる　能去　唐　蕭
山清や　稽田割る　稽田や　百日を　本生　花　枕
稽田や　百日を　年く　原の　松　塘

秋 今年　汎

今年汎母の昔とは　村　松
る黄の昔今ふお稽　弥村　柳　山人
あるこの中に野汎の　多四　文　唐
野汎汎て隆母の　素　重　蛙
生活な女住せに　本全　花　枕
清るるる人を清て　松　塘

妖怪俳句

影法師　通りて長い夜　長ぶ　京ト一京
夜に夜中に　秋の雨　傍振一　蕭
怪るる中　長夜の黒　四時　仲　秋
那　雨る　黒の溜　大サカ　こ　交
時雨で　夜の雨　清の　アキタ　る　吟
秋の夜中　何ぞ　雛子　上ツケ　一
溜船　ふ雨の如　如中　林　梅　枕
夜八　五年　の様　カンダ　性　芋
雨を　百年　柚赤　秋　清　原
来る　中に　所　ビワ　月
雛　貴の　この　雛　この　雨
まい　月百本　枕の　葵　重
繁の　香清子に　雛少　雨　那
面ら　繁嬢　て　明　秋の　月
た　中く　雛も　ち　る　井　中　相一　蕭
獄門　時を　つ　ち　と　月　百　枕の　雛
雲山　る　迄　ち　と　月　る　井　中　相一　蕭
蕭年　の　那　ま　ふ　雛　月　百　枕の　雛
月夜　て　通り　に　交　雛　月　百　枕の　雛
桑　まい　所の　夜　雨　時　に　鄭　雛　雛
一　雛　骨の　用　に　桜　ち　る　蕭　山　る
一　引　こ　る　女の　蕭　中　る　蕭　山　る
一　那　分　す　る　女の　蕭　中　る　蕭　山　る
縮　毒　中　山　縮　毒　中　蕭　中　た　蕭　山　る
人　塗り　中　雛　の　死　雛　中　秋　時　雨
首　延び　る　女の　赤　蕭　夜　永　る
地　天　弱　蕭　中　蕭　に　所　せ　何　の　る
天　蕭　中　蕭　に　所　せ　何　の　る



大正三年十月九日夕冒
[illegible]
[illegible]
[illegible]